

UDC 061.22 : 621.37/.39(520)

会長就任あいさつ*

会長 尾見半左右

今回はからずも皆様の御推挙によりまして、この光輝ある電気通信学会の会長という大役を仰せつかりました。

もともと私は、文字通りの浅学非才でありまして、この大役を果せるかどうかということは大へんに心配しているわけでありまして。その上広田前会長から、私にいろいろな期待を寄せておられるようでありまして、私はエンジニアの例にもれず経済関係の面では、まことに不得手でありまして、自信がありません。手ぎわよくいくかどうか、会員諸兄の忌憚のない御批判によって、御期待に沿うよう努力していきたいと考えております。私は、最近本学会から、遠ざかっておりまして、様子も皆目わからないというようなわけでありまして、役員および会員の方々の、心からの御支援と御協力によって、この光輝ある学会をさらに発展せしめたいと念願するわけでありまして。

私が只今申上げられることは、学会の発展に対し誠実と努力を傾けることだけで、新規な構想は、現在まだ何も持ち合わせておりません。しかしながら折角立ちましたので、私の所見というようなものを申し上げて御あいさつにかえたいと思います。

われわれ電気通信、あるいは電子工学に関連する者の一人として戦後たどって来た道をふりかえって見ますと終戦直後に、4等国というような銘を打たれ、物もなく、住む家もなく、茫然としておった時代に、製造業者の一員として私が感じたことは国の名誉も誇りもなくなった今日、私どもは何に頼ったらよいのかと言うことを考えたのでありました。そこで、これは自分の努力によって日本の通信の技術を向上させて、われわれはそのものになりきってそれを頼りに生きていくよりほかにないと感じた次第でした。国民の一人として何がしかの誇りを持つということが必要でありますので、今後においても自分たちの力で、生きていけるような、そして満足し得るような生活にまで向上していきたい。こういうようなことを考えていたわけであり

ます。現実には私が感じましたようなことは杞憂であったかもしれません。つまり、日本人の生きる力は非常に強く通信技術、電子技術方面の発展が非常に顕著でありまして、ただいまになって考えてみますと、戦後のあのぼう然たるありさまは、全く夢のようなわけでありまして。この間、本学会を中心としまして、たくさんの輝かしい功績、幾多の光輝ある仕事がなされておりますことは、皆さんよく御存知の通りであります。自己満足に過ぎてはいけませんが、日本人はやればやれるものだとの感を深くしました。

最近第2次の産業革命が、電子工業というものを中心に起きつつあるということ、よく聞くのであります。これはまことに喜ばしいことであると同時に、私どもは非常に責任を感じるわけでございます。

考えてみますと、17世紀ごろに蒸気エンジンというものが発明されまして、それによってエネルギーを非常に安く手に入れることができる。つまり、エネルギーの民主化とも言いましょうか。これが第1次の産業革命であったわけです。これが次第に発展いたしまして、電力の獲得それから最近では原子力の獲得、とこういうことになりまして、一応エネルギーを獲得するということの戦線というものは、山が見えたという感じがするのであります。

そこで、第2次の産業革命と言われる、電子工業は、御承知のように、思想の伝達とか、あるいは思考力の処理というようなものが非常に安価敏速にできるということ、これが第2次革命の要因であります。

こう考えますと、私どもが、通信あるいは電子工学に身を置いたということは、大へんしあわせだと感ずるのであります。また同時に大へんな問題であるともいえるのであります。只今私共が身をもって感じていることを卒直に言うならば、これまで通信工学については、日本電信電話公社が中心になって指針を与えておられたが、この面については今後もそのように期待されましよう。その故に幾多の同軸ケーブルの方式が目ざましいまでに発展し、また、マイクロエープの技術が世界の水準を抜いている。また日本式のクロスバ交掲方式も発展しつつあります。最近では細心同軸ケー

* New President's Address. By HANZO OMI [論文番号 3490]

* 昭和37年5月19日の本会通常総会における講演。

ブルが完成した。ついで IDP についても、電電公社を中心にして実現の緒につかんとしている。中心があることはわれわれに取っては大へん安心した気持ちで進むことができます。一方電子工業のうちでも、特に電子計算器を中心にした技術および工業は、今後大へんな勢いで伸びようとしておりますが、近頃喧しく言われている貿易の自由化が、ここ 1、2 年のうちには、この面でも具体化されようとしておりますので、先進外国の力がどんどん入って来て、底の浅いわが国の業界が大なる脅威にさらされることとなります。官民共にこれに対しよすべく大童になっていることは、皆様によく御承知の通りであります。元来私は資材や巨大な設備機械の不要な電子工業こそはわが国にとって、全く好適な技術であり、産業であると考えております。しかも若い秀れた青年技術者が比較的多い点から見ても、この業種はわが国の強みであると思っております。

しかしながら現実には仲々容易ならぬ様相を呈しております。その理由は 2 つあると考えられます。そのうちの 1 つは外国ではこの種技術が軍事研究の余慶から生ずることです。他は、開発技術力の結集のいかにあります。

外国主として米国の様子は、御承知の通り、GM や宇宙航行あるいは防空というようなものの開発のために、国家の膨大な資力が民間の企業に投下せられております。その成果が、すべていま申し上げたような電子計算器の発達とか、あるいはそれに関連する素子の開発に、非常に強い影響があるわけです。しかも、その進歩発達はきわめて速やかでありまして、過去の通信機の発達のテンポとは比較になりません。たとえば電気機械的交換機というようなものにつきましては、従来 20 年あるいは 30 年の機種寿命が期待できたのでありますが、今日の電子計算機になりますと、せいぜい 3～4 年ぐらいの機種寿命であります、われわれが嘗々として、やっと完成したと思うとたんにつぎの進歩した外国品が押し寄せて来るという事態であります。その応接にいとまがない。しかも、これを追っ

て独自の開発をして行くには膨大な人と開発資金とがいるので、正面戦斗で勝利をうることは至難の業であります。大へんな困難のように感ずるゆえんであります。しかもだんだん大規模高速小形化というような問題が、つきからつきへと現われて参ります。これらに用うる部品のなものの開発につきましても、かれに追随するだけでも一通りの苦勞ではありません。

しかしながら、こう悲観論だけを考えて、無為無策であることは許されぬ。さきほども申す通り、電子技術に関する工業こそはわれわれの本命と考えるべきでありますので、わが国の長を活かし、すなわち、日本に生れた新技术をわれわれの手によって生かし、機動的に独自の立場を作らなければなりません。幸いに非常に優秀な若いこの方面の技術者がたくさんに日本に育ちつつあるし、この面ではあまり外国にひけはとらないという感じがするのであります。同じような経済条件ということで活動するならば、われわれのほうが有利だというような感じも致します。すなわち開発技術力の結集のいかにによっては、貧弱な資金によっても、相当に対抗できると思えます。

ただ期待するだけでは画餅でありまして、今後は何としても技術力の集結ということの現実に力を用いていかなければならないと思えます。析角優秀な素質を持ったたくさんの研究者の方々の力を効果あらしむるためには、国家的機関によっても確立された計画というものをつくり、それに技術力を結集していくところにのみ期待が持てるのではないかと考えられます。

こういうことをしますためには、政府当局におきましても色々な施策を講じているようではありますが、学界としても考えなければならぬ問題でありましょう。

今後は私と致しましてもできるだけこのような趣旨に添って努力をするつもりであります。どうか会員の皆様も、こういう意味合いにおいて、御関係の面の一つの方向に力の結集をして、新しい事態に対処していくようお願いをいたします。これをおもちまして、私の御あいさつといたします。